歴史巷談

二つのお家騒動——蛇責めのヒロイン伝説

戸山恵子
（会員・佐伯市匠南区）

小さいときに見たラクテンチの菊人形、そのなかで、猫が女の人に化けて、行灯の油をペロペロなめるのや、美女が何匹もの蛇がはい回る部屋に押し込められている場面が気憶に残っている。そのとき、幼心にもぞっとした。あの二つの名場面が、鍋島の化け猫であり、加賀騒動の浅尾の蛇責めであると知ったのは、それから三十年余りも経ってからのことである。

お家騒動といえば、直ぐに思い出すだけで伊達・黒田・加賀・鍋島等々、江戸時代二百六十年の間に、大小様々のものが伝えられている。そして、それが幕府に知れて、取りつぶされたり、転封・減封されたり、あるいは内々に済まされたりと、事後の処置は様々だが、このほかにも歴史の中に埋もれてしまったのも、かなりあったんではなかろうか。

例外でなく毛利家にしても、それがみられるようである。まぁ、人が集まれば、派閥が生まれ、権力争いに至るのは、何時の時代も同じで、それが血のつながる一族はもとより、家意識や、主従関係が、現在では考えられないほど強かった江戸時代の大名家では、尚更だったと思う。それこそ、様々な経緯、様々な形で発生し、処理されていったものだろう。

登場人物にしても、名君から幼君、美しい側室、悪家老に悪徳商人、忠義一途の家来から茶坊主に至るまで、嘘と誠が入り交じって、豪華けんらん、まるで人間の見本市である。ただ、伊達騒動の烈婦政岡（わが子に毒入りまんじゅうを食べさせる乳母）や、加賀騒動の浅尾（蛇責めで殺される悪女）が嘘であり、実在の人物でないことは、誰でも気付くことだろう。

このお家騒動、江戸の前期と後期に分け、知名度からして、前期の代表に仙台藩の伊達騒動、後期は前田藩の加賀騒動を例にとって考えてみることにしよう。というのも、毛利家にも前期と後期に二回、この二つの騒動のミニ版ともいうべき事件が起きていたことを発見したからである。

前期（江戸中期、五代将軍ぐらいまで）の特色は、例外なく宗主権の奪いあいであること。戦国の余風なお消えやらず、同族の団結にむり戦国期を乗り切ってきただけに、当主が馬鹿ではこの役はつとまらない。そんなことがあれば、同族の実力者にいつでも取って替わられる。そのことは、平和な世の中になってもその名残が見られ、同族は宗主の施政に干渉し、度が過ぎると、当主が凡庸だったり、幼君だったりした場合は、これに取って替わろうとしたのである。

当主は当主で、宗主権を守るため、腹心の家臣を集め、過去の功績は功績として、平和な時代の殿様は、武力でのしあがった実力派より、知力で勝負しようとする。が、これを逆の同族の方から見れば、苦難と創業時代にのみ利用して、あとは体よく追い払われたことになり、面白くない。このことは、何も昔に限らず、現代の同族会社の発展期の経過そっくりである。

さて、争いが大きくなると、藩内では収まりが付かず、事件を幕府の裁判にゆだねる。どちらか一方から訴え出て、まだ評定所のない江戸初期には、大老や老中の役宅で審理し、裁決したようである。黒田・伊達などがその良い例だと思う。毛利家にしても同じである。

ところが、この訴えはお家騒動に結末をつけるだけではなく、幕府にとってこれを持ち込まれることは、いわば、もっけの幸いなのである。これを機に好きなように大名を料理できたし、同時に、そのことをもって他の大名を威圧することができた。大名統制にこれほど好都合なことはなかっただろう。徳川政権はまだ定まらず、大名の実力削減を急いでいたときのこと。それだけに幕府は遠慮なくバサバサと裁く。大名そのものの改易や取りつぶしも多く、元も子もなくなることが多かったのが前期の特色といえる。

そこで、話をわが毛利家へ移そう。話は違うが、私の夫の家は堅田にある。堅田は、その昔天領だったとかで、未だにその意識は残っている。あるＰＴＡの会議の席で

田舎のおじさん風の人が、

「よそもんはだまっとれ。わしら、天領やで」

と言ったとか言わなかったとか。

言われた奥さんもびっくりしただろうが、聞いた私は思わず笑い転げてしまった。そこで、私はその方に堅田が天領になった経緯を説明してあげた。天領というのはそんなに自慢するだけのものではなく、お家騒動の、有難くない置き土産であることを。

初代高政の次が高成（系図参照）。その二代目高成が三十歳の若さで急死。彼には正室佐久間氏が生んだ三歳になる市三郎という若君がいた。当然、この市三郎がお世継になるはずのところ、幼少であることを理由に、高政の弟森吉安は、高成の異母弟（生母は吉田氏）で、当時、毛利家の家老をつとめていた高明をそのあとに推した。ここで国元の吉安・高明派と江戸表の市三郎・並河（江戸家老）派とに分かれてのお家騒動が始まる訳である。同じ家老といっても森吉安は弐千八十石、並河は三百石に過ぎなかったけれど、江戸家老の並河は幕閣にも顔がきいていたのであろう、大老酒井雅楽頭の私邸を尋ね、藩情を述べて、正嫡市三郎の家督相続を嘆願した。

これによって市三郎は家督を継ぎ、三代高尚となる。一方、収まらぬのは破れた吉安・高明の二人。佐伯での領地二千石を幕府に返上、自分は旗本となり、二度と佐伯の地を踏むことは無かった。幕府は吉安から献上された堅田と床木を「天領」として、そこに代官を置いて治めることになったというわけである。私としての考えでは、高政未亡人の福寿院（昌子・木曽義昌の二女で、生母は信玄の娘真理姫）の意向も重きをなしたのではないかと思いたい。

二万石と六十万石の違いの差こそあれ、伊達騒動と同じような事が見られると思いませんか。若くして当主が亡くなる（伊達家では引退）その後の家督を巡って、実力派の前藩主の一派と、正嫡の幼君を守る一派の対立。また、伊達家の政岡というしっかりものの乳母は、毛利家では多賀勢の局として登場。彼女に抱かれて、酒井忠勝に御目見えしたとなっている。伊達家も毛利家も酒井忠勝に訴えて、その判決を受けている。もっとも大藩だけあって、その間の事情は比べ物にならないくらい複雑だが・・・。ただ、前期の特徴がよく出ているという点では、同じだと思える。

蛇責めと不倫ー後期のお家騒動

さて、次は、意外に知られていない二つのお家騒動に移る。時代は百年程下がる。この頃になると既に幕藩体制が確立し、経済のめざましい発展と、それに伴う矛盾から各藩とも例外なく財政が苦しくなっている。貧乏から抜け出すためにあらゆる手段を用いる。まず、極端な緊縮政策。手近なところで藩主の生活費のきりつめ、更に家臣から知行の借り上げを行うのがお定まりということである。産業の振興と重税と、今も昔も変わりはない。こういう手荒い政策は、保守的で引っ込み思案の老臣にはやれない。宗主権の確立で、既に藩政から遠ざけられていた門閥層は、この非常事態に処する道はなかった訳で、結局、才能ある者を抜擢して事に当らせるより仕方がなかったのである。家格や身分など言っておられず、軽輩から取り立て、藩政に参加させる傾向が見えてくる。

加賀騒動の大槻伝蔵・お由羅騒動の調所笑左衛門などが、その代表的人物に当たるだろう。彼らは何の後ろ盾もなく藩政の大改革をやるのだから大変である。殿様の生活費のきりつめは奥女中の猛反対に会うだろうし、知行の借り上げともなるば、藩士の生活を脅かす。そして、何時も攻撃の先頭に立つのは、保守的な門閥層である。彼等にしてみれば、強い身分制の中で軽輩から出て、藩政を左右するのは「身のほど知らぬ無礼者」でしかなかったのである。まず、そのことに敵意をつのらせ、更に知行の借り上げなど、自分たちの利益に反することに腹を立てる。こうして、保守と革新の両派が激しくしのぎを削ることになる。

ところで、派閥争いは、藩主の権力が強ければ問題はないが、幼少だったり、凡庸であったり、特にこれが家督相続と時期が重なると、継承問題で騒ぎが大きくなる。両派は自分に都合のよい藩主を立てようとして争い、時には反対派の藩主を毒殺しようと企む。時代劇で見る悪家老と悪徳商人と毒婦型の側室が組んで、お家乗っ取りを図るのも、このことが原形をなしている。

世に中興の英主といわれる殿様も多いけれど、上は八代将軍吉宗から、前田家六代藩主吉徳・毛利家六代高慶に至るまで、その類似点といえば、若くしてその座につき、自分の思うままの政治を行ったことだろう。三人とも、本来は藩主になるべきでないポジションにいたことが（兄たちの若死に）かえって思い切ったことをやれる

性格を作ったのだろう。その長い治政（三十年以上）における業績を挙げることは略するが、子供の数は多く、それがお家騒動の原因の一つになっている。

正室が生きている間は起きなかった騒動も、とかく大事に育てられ過ぎたためか、無事成人する確立が低く、そこに問題が生まれ、これに保守・革新の両派がからみ、ご存知のとおりお家騒動となる。

毛利家の場合、「おませさま事件」として巷間に伝えられている。

おませ（満勢子・山下氏）は、江戸の娼家に育った舞妓といわれ、十六歳の時に高慶の妾になり、参勤交代で高慶が国元へ帰るときも彼女を伴うほどの寵愛ぶり。国元ではお志幾の方・お津世の方らを中心に出世を卑しんで白い目で見られ、やがて、身重になった彼女に数々の嫌がらせをする。それに耐えかねて、彼女は再び江戸に戻り、市中に身を隠して、無事、大八郎を産む。

一方、高慶は、側用人岩本平左衛門に命じて、彼女を探し出し、再びその寵愛をほしいままにした。

享保三年九月、高慶は正室宗氏（琨子）の産んだ長子高通を伴い、任官のお礼言上のため江戸城に登城した。将軍吉宗に拝謁の途中、どうしたものか城中で発病、下痢のため退出するという事態が起きた。父の高慶は将軍家に対する不敬を恐れ、高通を謹慎させ、病気と発表して邸外に出ることを禁じた。

翌四年、高慶は高通を廃嫡。当時三歳のおませの方の生んだ大八郎を嗣子とし、同時に側用人岩本平左衛門を家老に起用、今まで家老だった戸倉氏は追放、江戸家老だった益田氏も出奔と、こうした一連の事件が続き、毛利家の奥向きではおませと岩本が図ったことだとささやき、彼女への嫉妬心を燃やし、岩本起用を心よからず思う人々と結託した。

高慶は、佐伯城内の動きを察知していたが、岩本の才能を知っていたので、素知らぬ態度で藩政に関与させていた。が、収まらぬのは長子高通の家来たちである。それから六年後、「不らちな行為あり」として、おませは下屋敷に禁固、そして、翌年狂死（自殺とも他殺とも）。同年、岩本も「法如院（おませ）殿の病中無念のことあり」との理由で家老職を取り上げられ、隠居を命じられる。それから十二年後には高能（大八郎）も病死してしまい、老いた高慶は長子高通の子、寅太郎を江戸に呼び

七代目とする。

以上が実説だが、おませ様は若殿様に毒を盛り、それが発覚して捕らえられ、何百という蛇を入れた大樽の中に投げ込まれ、責め殺されたという話もある。その時の蛇を取った村の人は、おませ様のたたりで蛇肌の子供が生まれるようになったということである。

この蛇責めが加賀騒動とそっくりである。わが子を百万石の殿様にしたい真如院（お貞の方）は足軽出身で、出世欲の強い大槻伝蔵を味方に付け、不倫の結果、六代吉徳を事故死に見せ掛け、七代宗辰を毒殺、次の八代重熙の毒殺は失敗する。

蛇責めは真如院の待女浅尾（毒を盛った実行犯人）で、世間では、ここが加賀騒動の見せ場になっている。

時も人物もほぼ同じである。加賀騒動の大槻伝蔵を調べれば調べるほど、赤字財政を再建した有能な経済官僚だったことがよく分かる。そして、前に述べたようにお家騒動は藩内で片付けられている。幕府に介入されないため、全てが有耶無耶にされている。ぼやけた部分が多いため、噂が勝手に独り歩きする。浅尾やおませの蛇責めは伝説にすぎないが、如何にも刺激的で凄惨なシーンは、日本人好みのサディズムを大いに満足させたのだろう。

先日、久成寺に、高慶が法如院（おませの方）の菩提を弔うため建てたという一石一字塔を見に行った。少しばかりきれいだったのとよそ者であったことが二人の人生を狂わしたのだと思った。

真如院といい、法如院といい、よそ者が殿の寵愛を独占したことから悲劇が始まったと言っていい。私は、このおませ様が好きで、調べて行くうちにそれは強くなった。身分も教養もない女性が、自分の個性だけで藩主の心を動かし、次の藩主のご生母様になろうとした・・・、最悪の手段を用いても。悪女もこれくらいになると立派だ。深窓のお姫様育ちの正室ではこんなエネルギーはわかないと思う。子供のころ、明日のパンのことを心配しなければならなかったからこそ、彼女のバイタリティは生まれたのだろう。

与党も作れず、いや、作る必要の無いほど殿様の愛を独占した女の物語。静かな辺境の地の噂好きの女たちにおませ様は、格好の昔話を残してくれた。私は彼女に乾杯したい。

系図A 毛利家

- 正室 昌子
  - 1高政
    - 吉安
    - 吉田氏
      - 高明
  - 2高成
    - 正室 佐久間氏
    - 3市三郎（高尚）当時三才

系図B 伊達家

- 伊達政宗
  - 愛姫
    - 2忠宗
      - 3綱宗
        - 初子
        - 4亀千代（綱村）当時六才
  - 宗勝 — 市之助（母多田氏）

系図C 毛利家

- 6高慶
  - 高通（正室正室・宗氏）— 7高丘
  - 津礼子（母太田氏）
  - 亀三郎（〃 夭折）
  - 千代能（〃 夭折）
  - 千吉（〃 夭折）
  - 成五郎（母奥井氏夭折）
  - 吉子（〃）
  - 高能（母山下氏おませの方）
  - 富子（母篠原氏）
  - 弁子（〃）
  - 源八郎（母奥井氏）
  - 沓子（〃）

系図D 前田家

- 6前田吉徳
  - 7宗辰（母以与の方）
  - 喜代（母滝の方）
  - 8重熙（母多見の方）
  - 聡姫（母お貞の方）
  - 勢之助（〃）
  - 揚姫（〃）
  - 益姫（〃）
  - 八十五郎（母夏の方）
  - 暢姫（〃）
  - 保姫（〃）
  - 11治修（〃）
  - 9重教（母ぬいの方）
  - 10重教（母流羅の方）